様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４７７２

研究課題名（和文）「道徳科」教材研究の手法開発

研究課題名（英文）Method Development of Studying Moral Teaching Materials

研究代表者
堺　正之（SAKAI, Masayuki）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：１０１７０５６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：主として3点を挙げることができる。
第１に、教科としての実施水準を保つため、道徳科における「教材」研究のありかたを示した。第２に、教師が協同して（チームで）取り組める研修スタイルを作り出すことが必要であることを提言し、さまざまな研修会においてこのスタイルを試行した。第３に、教員養成カリキュラムにおける道徳科の教材研究・教材開発に関する科目の開設について報告を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的成果は、道徳科における「教材」研究のありかたを教科としての実施水準との関連において論じたことである。その基礎の上に立って、教員養成カリキュラムにおける道徳科の教材研究・教材開発に関する科目の内容を構想し、2018年度から福岡教育大学の教員養成カリキュラムに「道徳教材開発研究」（Ⅴ・Ⅵ期　選択必修）を開設した。
また、教師が協同して（チームで）取り組める研修スタイルを作り出すことが必要であることを提言し、教員免許状更新講習（選択必修領域）や免許法認定講習などの機会においてこのスタイルを実施することにより、成果の社会的還元に努めた。

研究成果の概要（英文）：There are three main points.
First, in order to maintain the implementation level as a subject, I showed the way of "teaching material" research in the moral classes. Second, I suggested that it was necessary to create a training style that teachers could work together (in teams), and tried this style at various training sessions. Thirdly, I reported on the establishment of subjects on teaching material research and development of teaching materials in the teacher education curriculum.

研究分野：社会科学

キーワード：道徳科　教材　教員養成　教員研修

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

平成 27 年 3 月に一部改正された小・中学校学習指導要領では、「特別の教科　道徳」（以下「道徳科」と記載）について、その目標、内容とともに、指導方法の工夫にまで踏み込んだ記述がされている。これまでの道徳の内容学を基盤としつつ、「教科化」という教育課程上の変更に対応した研究として推進するため、本課題に取り組むこととした。

（１）道徳科における「教材」の要件から

まず、道徳科における「教材」とは何かが問われるという点である。教科としての実施水準を達成するには、半世紀を優に超えて実施されてきた「道徳の時間」の財産を継承するとともに、これを批判的に吟味して教材としての要件を満たしていく必要がある。これは、教材の形式や内容についての要件であると同時に、教材としての取り扱い方、すなわち指導法の適否につながる観点でもある。

（２）道徳科の指導力を育成する教員養成カリキュラムの課題から

中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」（教員養成部会 答申案）（平成 27 年 10 月）を踏まえ、理論面、実践面、実地経験面の三つの側面それぞれの充実を図ると同時に、教職指導の観点からはそれらを一貫するもの、養成段階にある学生にとっては道徳教育を担当する教育者としての自信につなげる核心が必要である。

（３）研修とつなぐ視点から

道徳の教科化について提言した道徳教育の充実に関する懇談会「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）～新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために～」（平成 25 年 12 月）では、道徳教育の現状として、「歴史的経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮がある」ことが指摘された。ただし、道徳の時間の設置当時のイデオロギー的対立がそのまま学校に残っているとは考えにくい。むしろ、教員として採用されて以降、学ぶ機会に恵まれず、いまさら道徳の時間に取り組もうにも自信がない、という「負の伝承」がその要因として考えられる。経験年数に応じが課題があることを認めた上で、協同して（チームで）取り組める研修スタイルを作り出すことが必要である。

２．研究の目的

（１）従来の道徳の時間に関して提唱されてきた「資料分析」の方法についての批判的検討を踏まえて、小・中学校における道徳科の教材研究のあり方を解明する。

（２）大学の教職課程における理論面、実践面、実地経験面からの学修に教材研究力の養成を位置付け、これを軸として道徳の指導能力の育成を図る方策について提言する。

３．研究の方法

（１）道徳「教材研究」についての理論的検討

今日まで定着してきた道徳の時間の「資料分析」について、その思想、方法論と背景にある授業論などの視点から文献や資料をもとに検討し、道徳「教材研究」に求められる視点について明らかにする。また、他教科における教材研究の手法との異同を明確化する。

（２）研修モデルの提案と試行

若手、中堅、ベテランのそれぞれに課題を有することを認めた上で、協同して取り組める研修スタイルを作り出す。その際、共有化するのが難しい手間暇のかかる物的な「しかけ」は最小限にして、「思考」の広がりと深まりに焦点をあてて検討する。試行の場として、教員免許状更新講習（選択必修領域）、教育職員免許法認定講習を活用する。

（３）教職課程における「教材研究」の意義についての検討と提言

本研究の成果を教職課程における学修（理論・実践・実地経験）全般に反映させ、教材研究を軸としながら道徳の指導能力を育成するプログラムとして提案する。小学校道徳科の教科用図書（教科書）に収録された教材を用いて、学部開設科目「道徳教材開発研究」を実施し、初年度の成果と課題を踏まえて申請者の勤務校における教員養成カリキュラムの一層の改善について検討する。詳細については、次項「研究成果」において述べる。

４．研究成果

福岡教育大学における平成 28 年度新カリキュラムでは、初等教育教員養成課程における「教育実践力育成科目」のうち「教育内容科目」（必修 20 単位、選択必修 4 単位）の選択必修科目として「道徳教材開発研究」（Ⅴ・Ⅵ期）が設定された。「道徳教材開発研究」の開講初年度（平成 30 年度）の授業計画、実施内容と現時点での課題を、本テーマの研究成果として述べる。

（１）背景と経緯

福岡教育大学で平成 28 年度に発足した新カリキュラムでは､学部の科目構成が大きく変更され、教員養成に関わる 3 課程の科目は「基礎学力習得科目」､「教育者素養育成科目」､「教育実践力育成科目」､「教育フィールド実践科目」､「学士総合力科目」により編成されることとなった。このうち「教育実践力育成科目」は「教育内容科目」と「教育指導法科目」から構成され、さらに「教育内容科目」は「小学専門科目」（必修 20 単位）と「教材開発研究」（選択必修 4 単位）から構成される。「道徳教材開発研究」（Ⅴ・Ⅵ期）は「国語科教材開発研究」「社会科教材開発研究」「算数科教材開発研究」「理科教材開発研究」「英語教材開発研究」「総合的学習教材開発研究」と一つのグループを形成し、学生はこの中から 1 科目 2 単位を修得しなければならない（もう一つのグループは「音楽科教材開発研究」「図画工作科教材開発研究」「家庭科教材開発研究」「体育科教材開発研究」により形成される）。

（２）「道徳教材開発研究」の計画と実施

①授業計画

学生に示したシラバスは、以下のとおりである（本学ホームページに掲載されている公開版を再整理した）。

【授業の目標・概要】

小学校「道徳科」の内容についての理解を深めるとともに、道徳授業で用いる教材の分析方法を習得し、教材の開発とこれに基づく指導案の作成に生かす。

各自で発掘・開発した教材は、共通のチェックリストにより学生間で相互に評価する。仲間の評価、改善意見を参考にしつつ教材に修正を加え、最後に指導案を作成する。このような作業を通じて確かな内容観をもつことの大切さを理解させ、道徳教育の計画を内容の視点から読み解いていくことができるようにする。

（１）小中学校における道徳科の指導内容について確かな理解を有している。

（２）学校・学年段階や授業のねらいを考慮して魅力ある教材を開発することができる。

（３）開発した教材に基づいて具体的な指導過程、指導方法を構想することができる。

【授業で身につけるべき資質・能力】　（　）内は本学スタンダードとの対応を示す

○道徳教育に関する実践理論をふまえて、具体的な指導方法を構想することができる。（教育課程及び指導法についての知識・理解）

○授業のねらいや子どもの実態に即して魅力的な教材を開発することができる。（教材研究・開発力）

○今日求められる資質能力の育成という視点から道徳科の指導ならびに教育課程の編成について考えることができる。（教科等の内容が有する社会的側面の認識）

【授業計画】

１．授業の概要と計画の説明

２．改訂学習指導要領における「道徳」の位置づけ

３．「道徳」の内容とその取扱い

４．４つの視点の構造と各項目の発展性

５．教材開発に関する課題提示

６．道徳の教材（１）教材とは何か

７．道徳の教材（２）教材分析・研究の方法と実例

８．道徳の教材（３）教材分析・研究の試行

９．道徳の教材（４）教材の活用類型と指導過程への位置づけ方

１０．教材開発の事例検討（１）：読み物教材

１１．教材開発の事例検討（２）：映像ソフト等の多様な教材

１２．教材開発の試行（１）

１３．教材開発の試行（２）

１４．教材開発の試行（３）

１５．教材およびこれにもとづく指導案の提出

AL1：各自が道徳の内容観を深め、教材開発をおこなうことを課題とし、これに主体的、協同的に取り組むことができるように支援する。

②授業で使用した教材

授業で取り上げた教材は、大別すると以下のとおりである。

ア．道徳科の教科書に掲載されている読み物教材

イ．福岡県内の小学校教員が自作した郷土資料

ウ．映像教材

エ．小学校における道徳授業が収録されているビデオ教材

③授業の内容

第 2 回から第 4 回では、受講学生の理解度の違いを考慮して、必修科目「道徳の指導法」にお

ける学習内容を確認した。第５回で「教材開発に関する課題提示」をした後、第６回から第９回では、「道徳の教材」をめぐる講義、演習をおこなった。そこでは、以下の内容に関する知識・理解が深まるように配慮した。

１．道徳の教科化と教材

（１）道徳授業における教材の意義

道徳授業の教材には、児童が道徳的価値の自覚を深めていくための手掛かりとして大きな意味があると考えられている。児童が人間としての在り方や生き方などについて多様に感じ、考えを深め、互いに学び合う共通の素材として重要な役割を期待され、これまでも様々な形の教材が使用されてきた。

（２）道徳科教科書の誕生

道徳の教科化を議論した道徳教育の充実に関する懇談会の報告書では、教科書のメリットとして、教科書検定制度の下で出版社がよりよいものを作ろうと互いに切磋琢磨することで質の高いものが生まれること、また複数の民間発行者が作成する検定教科書の方が多様な価値観を反映できると述べられている。

（３）道徳科教材の要件

小学校学習指導要領では、道徳科の教材に関する留意事項として大きく 2 点が示された。それらは従来の学習指導要領解説において述べられていた内容と重なる内容が多く、これまでの道徳教育の原則が大きく変わるものではない。しかし、それが学習指導要領本文に示されたことは、はじめて作成される道徳科の教科書を意識した結果である。

２．道徳科における教材

（１）道徳科における教材の意義

一般に、授業とは「教師が教材を通して子どもに教えること」と「子どもが教師の提示する教材を通して学ぶこと」が同時に進むことであり、教師と子どもが教材を媒介として教育的な関係を結ぶということであると説明されている。道徳授業でも目標（ねらい）を構成する具体的内容が明確になっていることは大切であるが、教師はその内容を直接に子どもに対して示すのではない。子どもに提示されるのは「教材」である。これまでも道徳授業では多様な素材が用いられてきたが、多くの素材はそのままで教材となるわけではなく、教師が授業の「ねらい」とのかかわりにおいて位置づけ、意味づけをおこない、場合によっては修正、再構成することによって初めて教材となる。

ただし、一般教科の授業においては学習内容に関して教師と子どもの間に知識や技能の面での圧倒的な差が前提とされているのに対して、道徳科においては、むしろ内容について教師と子どもが共に探求することを重視する。

（２）教材と指導観

道徳的価値の自覚を中心に据えれば、教材の選択と授業への位置づけは児童の実態の把握と指導のねらいによるのであって、教材が授業のあり方（教師の指導観）を決定してしまうものではない。教師の指導観に基づいて「教材は成立する」と言い換えることもできる。逆にいえば、評価の高い教材も、曖昧な、あるいは不適切な指導観の下では、そのよさを引き出すことは難しい。

たとえば、授業者が「善／悪」あるいは「ホンネ／タテマエ」といった二分法にとらわれていると、児童が現実の生活において経験する葛藤や迷いをつかみ損ねてしまう。このように考えると、道徳科の教材もただ正しいことが書かれてあってそれを正しいこととして学ばなくてはいけないといった単純なものではない。

３．教材分析の視点と授業構想

（１）教材分析、教材解釈

一般に「分析」とは、複雑な仕組みをもつものを、さまざまな観点から単純な要素に分解して考えることである。これによって、そのものの性質（本質）をとらえることをめざす。そうすると、「教材分析」とは、教材という複雑態（全体構成）を解明するため、これをいくつかの要素に分解して考えることだといえる。道徳科の教材はたとえば以下のような観点から分解することができる。

①道徳的価値の観点

小学校学習指導要領では道徳科の目標に関して「道徳的諸価値についての理解を基に」とされていることから、教材には児童が自身の道徳的価値を意識化し、あらたな考えに至る端緒となることが期待される。そのため、教材が授業の主題に関わる道徳的価値に関してどのような切り口となり得るか、という観点から分析する。

②登場人物の観点

多くの読み物教材には、人間あるいは擬人化された動物、植物、その他の事物等が登場し、話の進行に関わってゆく。それら登場人物の「行為」やそのもとにある「考え」に着目し、これと道徳的価値との関連を考える。道徳学習では、道徳問題を「他人ごと（ひとごと）」ではなく「自分事」としてとらえることが重要だと説かれることがある。しかし、ひとくちに「道徳問題を含む事例」としての教材といっても、その語りの形式はさまざまである。

③ストーリーの観点

物語の形式をとる教材の場合、話の進行につれて登場人物の考えが変化したり、複数の登場人

物が相互に影響を与えたりすることがある。このような登場人物の葛藤や決断の「場面」に焦点を当てることにより、道徳的価値を人間の生き方との関連においてとらえることが可能になる。
もちろんいずれの文章にも「作者」は存在するが、作者の思いをそのまま受け入れて授業を構想することが教材研究ではない。「理解する」ことは大切であるが、それは必ずしも「受け入れる」ことと同義ではない。指導者は作者の意図を授業のねらいとしなくてもよいのである。
（２）道徳の授業構想に資する教材研究
　児童こそが社会の多様性を構成する「個」であり、教室にはすでに複数の価値が共存していると考えれば、考えの交流を通して自己と他者の価値観の相違をあらためて意識し、了解し合える範囲を広げたり、納得できる理由を探したりすることが重要になる。このような機会を道徳の授業が提供するためにも、教材研究は必要である。
（３）交流型の教材研究
　発問に対する児童の反応と、これに対する指導者の対応（切り返し等）について考えれば考えるほど、あたかも指導者の側が用意した合わせ鏡に映る像だけを手掛かりとするような授業計画になる。さらに、授業場面では児童の表現を指導者が自身の意図の形に切り取って解釈（意味づけ）することが増えてしまう。このような問題を克服するための一方策として、交流型の教材研究が考えられる。
（４）教材開発へ
　書き下ろし以外の教材文では、原作の趣を生かしながらも、道徳的価値の視点から児童が考えを深めやすくするために、多少なりとも省略、加筆その他の改作が施されている場合が多いものである。これを原作と読み比べて教材の特徴を理解することは、自身の指導構想をもつための手助けになるであろう。しかし、そこから一歩進めて新たな教材を開発することもできる。

　小学校学習指導要領では、「特に、生命の尊厳、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化への対応等の現代的な課題などを題材とし、児童が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり､感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと。」と示されている。これは養成段階にある学生のトレーニングとしても有効である。養成段階で教材開発に取り組むことにより、小学校の「道徳」の内容について理解を深めるとともに、道徳科で用いる教材の分析・研究の方法を習得し、教材の開発とこれに基づく学習指導案の作成に生かすことができる。
　この授業では、各自が発掘、開発した教材について、構想段階から学生間で相互に評価するようにした。そのための共通のチェック項目を作成しておいた。これにもとづく仲間の評価、改善意見を参考にしつつ教材に修正を加え、最後に自身の学習指導案を作成するのである。このような作業を通して確かな内容観をもつことの大切さを理解するとともに、学校における道徳教育の計画を内容の視点から読み解くことができるようになることが期待される。

　「教職課程コアカリキュラム」では「道徳の理論及び指導法」の全体目標の下で、「（１）道徳の理論」と「（２）道徳の指導法」の一般目標と到達目標がそれぞれ示されている。そのうち「（２）道徳の指導法」に関する到達目標の６番目には「模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付けている。」と明記されていることから、平成３１年度入学生からは必修の「道徳の指導法」において模擬授業とその振り返りを計画に含めることになる。しかしながら、本学の必修科目「道徳の指導法」は大人数クラスで実施されており、特に初等教員養成課程では１クラスの学生が 100 名を超えている。さまざまな「制約要件のある中で、枠組みの設定、内容の精選、課題設定などにおいて、どのような部分を焦点化して主体的な学習を担保するのか」（①）が課題である。今後、多くの大学において工夫が試みられると考えられるので、情報を収集しながら本学の条件にあった授業展開を考え、これを授業担当者全員（非常勤講師を含む）で共有してゆきたい。

＜引用文献＞
① 谷田増幸「道徳の理論及び指導法」横須賀薫　監修、渋谷治美・坂越正樹 編著『概説 教職課程コアカリキュラム』ジダイ社、2018 年、91 ページ。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）
雑誌論文
①堺正之、道徳授業と指導過程を考える―教員の協同を生かした多様な展開の試みを―、道徳教育、査読無、第 58 巻 2 号（No.716）、2018、pp.4-7

〔学会発表〕（計　１件）
学会発表
① 堺正之、道徳の授業構想と教材研究、日本道徳教育学会第 90 回大会、2017 年 11 月 19 日、神戸親和女子大学

〔図書〕（計　3 件）
①永田繁雄、堺正之　他、平成 29 年版　学習指導要領改訂のポイント　小学校・中学校　特別の教科　道徳、明治図書、2017、総 117 ページ、16-17、26-27
②永田繁雄、堺正之　他、「道徳科」評価の考え方・進め方、教育開発研究所、2017、総 163 ページ、32-35
③永田繁雄、堺正之　他、平成 29 年版　小学校　新学習指導要領ポイント総整理　特別の教科　道徳、東洋館出版社、2017、総 168 ページ、82-85

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
①堺正之「授業改善レポート「道徳教材開発研究」開講初年度の工夫点と課題」福岡教育大学教育総合研究所研究プロジェクト（平成 29～30 年度）「学部カリキュラムに関する調査研究報告書」（平成 31 年 3 月）総 60 ページ、25-39
②上地完治（編著者）、堺正之　他、道徳教育（アクティベート教育学　9）、ミネルヴァ書房、2019（8 月刊行予定）

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：
(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：
※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。